

子どもたちの放射線被ばくが止まらない！

～郡山市の小中学生、約70%が基準以上の外部被ばくをしていた！～

福島県郡山市が市内の小中学生を対象に実施していた放射線個人積算結果を公表した。子どもたちは毎日、クイクセルバッジと呼ばれる被ばく積算量を測定するバッジを身につけて学校生活を送っている。被ばく線量の多い子どもで一ヶ月に450μSv(マイクロシーベルト)の被ばくに達している。校外活動も制限され、思い切り外で遊ぶこともできないまま、被ばく線量だけがじわじわと累積されていく。異常な状態としか言いようがない。
 (以下、ニュースより)

■郡山市の小中学生の外部被ばく量

2011年12月8日、福島県郡山市は「市内児童・生徒の個人積算線量第1回測定結果のお知らせ」として、市内小中学生25,551人の被ばく量の調査結果を発表。この結果、**最も被ばく量の多い子どもが月間450マイクロシーベルト**。平均が同120マイクロシーベルトであることが分かった。

【70%の児童生徒が国の基準を上回る被ばく】

[測定結果分布]

- 100～199μSv (61.31%) 15,666人
- 10～99μSv (32.73%) 8,363人
- 200～299μSv (5.71%) 1,459人
- 300～399μSv (0.23%) 59人
- 400～450μSv (0.02%) 4人

(参考：個人積算線量計(クイクセルバッジ)第1回測定結果概要)

1年間このペースで被ばくした場合、**約70%の児童生徒が国の安全目標値である年間1000マイクロシーベルト(1ミリシーベルト)を超える**計算となる。

郡山市は特に被ばく量の大きかった子どもについては追跡調査を行っていくとしている。

ここに示された結果は、線量計で測定される外部被ばく線量である。子どもたちの身のまわりにはこうした放射線を出す放射性物質がいたるところに存在している。それは風や飲み水、食べ物から体内に取り込まれることになる。従って、ここに示された数値以外に、内部被ばくが当然進行していく。

先ごろ政府から食品や飲料水の放射能汚染基準が示されたが、それでさえ依然、ウクライナなどのチェルノブイリ被害にあった地域より高い水準だ。

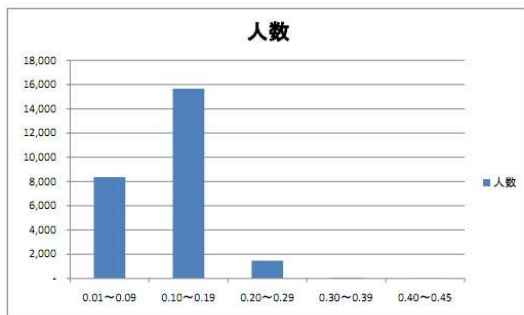
個人積算線量計(クイクセルバッジ)第1回測定結果概要

1. 測定総数 : 25,551人
2. 測定対象期間 : 平成23年10月5日(水)から平成23年11月6日(日)の33日間
3. 測定対象期間の自然放射線被ばく相当量0.06mSv(約0.07μSv/h)を除いた数値

全体	測定値
最高値(mSv)	0.45
最低値(mSv)	0.01
平均値(mSv)	0.12

測定結果分布

mSv	0.01～0.09	0.10～0.19	0.20～0.29	0.30～0.39	0.40～0.45	合計
人数	8,363	15,666	1,459	59	4	25,551
割合	32.73%	61.31%	5.71%	0.23%	0.02%	100%



郡山市の検査結果の報告文書には右のような資料も一緒に示されている。しかし、インターネットを通じて情報入手が容易になったこの時代に、この資料を見て安心感を持つ人はほとんどいないだろう。なぜなら、この資料はICRP(国際放射線防護委員会)のものを基本にしてつくられたものであり、**外部被ばくに限定した目安**にしか過ぎない。

NHKがめずらしく?低線量被ばくを追及した番組を年末に放映した。反響は相当大きく、この番組を見た人の多くがICRP(国際放射線防護委員会)の内実を知ることになった。

ICRPは運営資金や構成委員が原子力推進勢力に実質的に支配された組織で、原子力推進に妨げにならない程度の政治的基準を示す組織であることを、委員自らが認めていた。では、原子力推進にとって最も妨げになることは?

これまで何度も繰り返してきたように、内部被ばくによる健康障害の被害実態が公に明るみになることである。

低線量被ばくの場合、最も考慮しなければならないのは内部被ばくである。被ばく線量と健康被害の相関表に示される数値は「外部被ばく線量」の場合である。最も危険な物質とされるプルトニウムで内部被ばくしても、測定器には出てこない。プルトニウムなどの核種が出すα線、β線とよばれる放射線はエネルギー量が大きく、周辺の細胞に大きなダメージを与える。それらのエネルギーの大半は細胞の破壊に使われ体外には出てこない。例えばγ線は音のようなもので体を通すが、α線、β線は散弾銃のようなものだ。今回のクイクセルバッジで出てくる数値のほとんどは放射性ヨウ素、放射性セシウムから出るγ線の数値である。事故で放出された放射性物質は、東電の31種類に及ぶ。それらの拡散状況についての調査結果はいまだに示されていない。各地でストロンチウムなどの物質が市民レベルの調査で見つかっている。郡山市をはじめ汚染濃度の高い地域では複数に及ぶ放射性物質が存在しているはずだ。検査だけを実施している場合ではない。すでにかなりの子どもたちが自主的に避難、転居している。しかし、生活の目処が立たないなど現実的な壁に阻まれて退避できないたくさん人々がいる。故郷への愛着から留まることを決意した人もいるだろう。年老いてから見知らぬ土地で暮らすことは簡単ではない。だからこそ国が動かなければならない。しかし、今のところ子どもたちの一斉避難の動きはない。国は組織防衛を優先しているようにしか見えない。

福島県の子どもたちが身につけている個人積算線量計(クイクセルバッジ) * 通称ガラスバッジ

【この線量計の問題点】

- 被ばく放射線量が表示されない。
- 高線量の場所においても警告されない。

ここには被ばくデータだけが記録され、月に一度、回収され県が分析する仕組み。つまり、このバッジを身につけていても、何一つ放射線防護には役立たない。生活日誌も配布され「いつ、どこで、何を、どれくらいしたか」が一緒に報告される。

子どもたちはひたすら自分の被ばくデータだけを提供することになる。これが「福島が壮大な人体実験と化している」といわれる所以だ。

【ジュネーブ時事】によれば、世界保健機関(WHO)年次総会に出席した大塚耕平厚生労働副大臣は記者会見で、「**長期間の追跡調査が必要だ**」と述べ、**特定日や場所の放射線量データは蓄積されつつあり、原発周辺地域などの住民の正確な所在時間と場所が把握できれば、「(データとして)将来的な疫学に寄与する」との認識を示した。**

将来の疫学に寄与するために、今、そこで生きている子どもたちが犠牲になっていいわけがない。もし、日本でこの発言をしていたら大塚大臣は多くの批判を浴びただろう。しかし、マスコミは海外でのこの発言を追及しようとはしない。マスコミに大きな影響を与えているのが電力会社や電通である。この国の病みは深い。

